島根大学教育学部紀要別冊の発刊に寄せて

紀要編集委員長　秋重幸邦

「島根大学教育学部紀要」は，教育科学，人文・社会科学，自然科学からなる独立した３つの冊子として，1967年に第１巻が発刊され，この2008年で第42巻となる。学部教員の研究成果の発表の場として，少なくとも年一回欠かすことなく発刊されてきた。図１に，学部紀要に掲載された論文数の推移を示す。学部紀要発刊前の1951年から1966年までについては，「島根大学論集」にある教育科学関係の論文数を示している。大学院設置をめざし研究業績の底上げに励んだ1988年にピークがある。この年57編の論文が掲載された。また，この時期（1988年，1989年，1990年，1993年），紀要は年２回発行されている。しかし，1988年以降，論文数は減少の一途をたどり，2004年には９編，即ち，ピーク時の６分の１にまで落ち込んだ。査読誌に論文が流れ，紀要への投稿数が減ったのであれば，特に問題としなくても良いのであるが，実状は，研究へのモティベーションの低下，学部の研究ポテンシャルの低下を反映していると思われる。2004年から，大学は独立行政法人化し，競争的な環境の下，特色ある大学としての生き残り競争に突入した。中期目標毎の法人評価で，研究の質も問われるようになった。紀要編集委員会は，こうした大学を取巻く環境の変化に対応すべく，2005年に，それまで三分冊だった紀要を一冊にし，装丁をＢ５版からＡ４版に一新し，魅力ある雑誌へと衣替えした。さらに，2008年には，投稿規程の改定を行い，プロジェクト研究等の成果を発表する場として紀要別冊を新設した。

教育学部は様々な研究分野の教員の集合体であり，教員個々人は蛸壺の中に隠れがちである。特に，個人研究に重きを置く文系の教員にその傾向が強い。本号で特集する「世代間コミュニケーションと教育」は，本学部の文系教員が集まり組織した研究プロジェクトでの研究成果である。紀要別冊という新しい媒体への，研究プロジェクトという既存の研究組織を超えた新しいまとまりからの研究成果の発表である。学部の研究ポテンシャルの向上に向け，ここにその一歩を踏み出し，学部紀要の論文数の次なる頂上を目指すことができれば，幸いである。

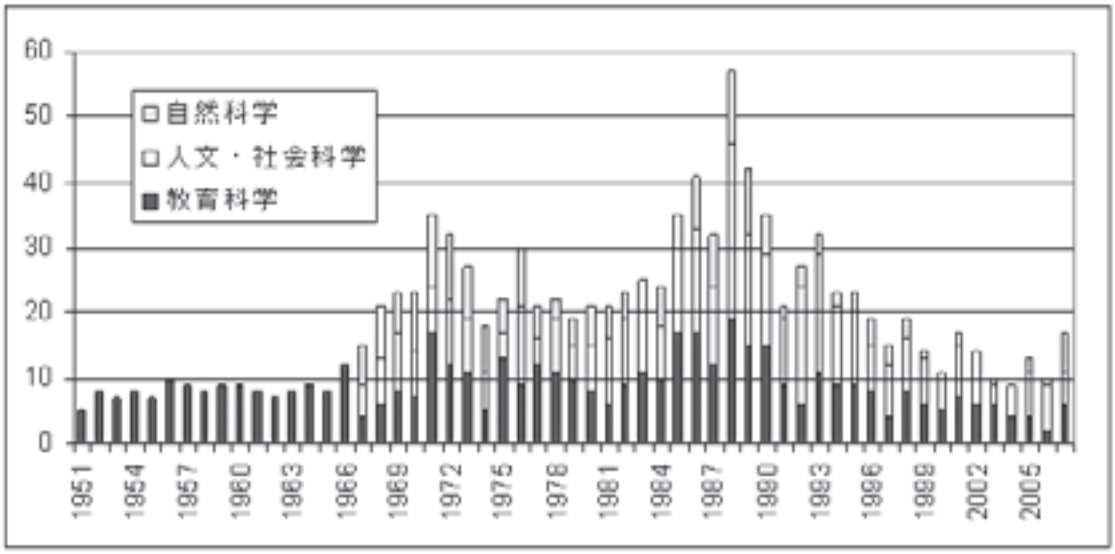

図１．教育学部紀要に掲載された論文数の推移（1967年1巻 - 2007年41巻）